

(1)教育課程

1)カリキュラム運営(p2)

本年度は、1年次・2年次が第5次改正カリキュラム（以下、新カリキュラム）、3年次・4年次は旧カリキュラムと、カリキュラムが混在する学校運営となっている。新カリキュラムは、4年制カリキュラムの評価から「科目の順序性」「横断科目のすみ分けと教授内容の重複」「生活者としてより深く理解するための教授内容と時期」等を見直し運用を開始した。特に「横断科目のすみ分けと教授内容の重複」については、発達看護論と健康段階別看護論の教授内容を精選し実施した。しかしながら今年度運用するなかで発達看護論における高齢者の加齢変化を教授する時間数が減少することでの臨地実習に向けた学習内容の不足が明確になり、令和6年度に向けてその時間数・内容を調整した。

2)学生の看護実践体験の保証(p4)

新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、感染対策・行動制限等は徐々に緩和されてきた。また実習施設の協力により、臨地での実習を行うことを大切に各施設と連携ができ、臨地実習がほぼ計画通りに実施でき目標達成ができた。次年度に向けては、更に感染対策をコロナ禍前の状況に戻しながら学習できるように調整を行い、専門職業人を目指す看護学生として感染予防や自己の健康管理の必要性を理解し行動できるよう、入学時から意識づけを行い実施されるように継続的に指導していく。

3)学生の看護実践体験の保証—実習施設の確保—(p4)

産科病棟、小児病棟での実習施設の確保は継続して困難な状況にあり、医療機関での実習にこだわらず地域包括ケアシステムの中で様々な施設での実習を検討し、施設確保に努めていくことに方針を変更した。具体的には次年度の発達看護論実習について、母性病棟、助産所ではなく子育て支援センターで実施できるよう調整中である。今後も、早めに臨地実習の受入れ状況等の情報収集を行い、適宜速やかに調整を行い新規開拓等、実習施設と連携を図りより効果的な学生指導につなげられるよう調整していく。

(2)教授・学習・評価

1)形態機能学、生化学の工夫(p10)

令和4年度の1年次生の疲弊感を改善すべく、令和5年度は、学生の自律した学びを支えるためには学生が学習にチャレンジするための“ゆとり”も必要と考え、学びやすい教科書選定ならびに各課題提出時期の調整や授業日程の工夫を意図的に実施した。特に形態機能学では、非常

勤講師と調整を繰り返し、座って聞くだけの講義スタイルではなく、「講義⇒模型を触って自分の身体で確認⇒再度視聴覚教材で知識を確認する」といった能動的な教授方略に変更し、成績の向上が図れた。さらに生化学についても非常勤講師と看護基礎教育での生化学における学習事項を確認しあい教科書の変更、教授内容の工夫を行い、再試対象者の減少につながった。

2) 臨地実習におけるつなぎ発展する時間(p10)

臨地実習での学びを豊かにしていくためには、実習前・実習中・実習後の学習準備・振り返りが大切である。新カリキュラムより、実習時間以外に自分自身で学習準備・振り返りができるよう実習前・実習中・実習後に授業日程を入れず自己学習できる自由な時間が取れるように工夫をした。この時間を「つなぎ発展する時間」と位置づけ、学生個々が主体的かつ計画的に実習に向けた学習、技術練習、振り返り等に活用することを目指している。授業評価からは「臨地実習が大変だが楽しい」という学生の声があり、「つなぎ発展する時間」が、学生が学習にチャレンジするための“ゆとり”を生み、結果につながっているのではないかと考える。

(3) 入学・卒業・就職・進学

1) 学生支援(p23)

学生生活で生じる悩みの相談に応じるためにカウンセラーによるスクールカウンセリングを実施している。利用者の延べ人数は、令和4年度が48件、令和5年度は33件と減少している。これは、新型コロナウイルス感染症5類移行により、学校生活だけでなく日常生活においても制限されていた社会的不安から解放されたことが影響していると考えられる。学生の抱える悩みは多様であり、教員と連携しながら支援を継続していく。

2) 入学試験状況(p25)

入学試験については表16～18の通り。18歳人口の減少と看護系大学の増加により応募者は年々減少している。今年度から一般試験科目の英語を廃止し国語、数学のみに変更した。また、県の便りにも試験日を掲載した。応募者数は昨年度から4名の減少にとどまり、定員を満たす入学生を確保できる見込みである。本校を知るきっかけに高校教員の勧めの割合も多く、次年度は高校訪問に力をいれていく。

3) 在学生の状況(p26)

令和6年2月13日現在、休学者は5名で、理由は学業不振や進路への迷い、精神面での不調である。教員が一人ひとり丁寧にサポートしながら、最善の選択ができるようかかわっており、令和5年度途中の退学者は0名であった。

4) 卒業生の進路(p28)

82名が卒業し80名が県内の医療機関に就職が内定している。2名は助産師学科に進学予定。

(4) 地域社会・国際交流

1) 地域交流、社会貢献(p29)

新型コロナウイルス感染症の5類移行により地域でも様々なイベントが開催された。

本校への依頼は積極的に受け入れ、表21~22のとおり学生ボランティアに延べ62名が自主的に協力し、地域住民との交流を通して様々なことを体験し成長する機会になっている。また、地域の方々にも大変喜ばれている。今後も地域交流を積極的に行い社会に貢献していきたい。

(5) その他

1) 専任教員の教育力向上(P28~31)

学内研修の実施や学会・研修等に計画的に派遣し、学会には研究成果を3題発表した。また、外部からの講師依頼も積極的に受け入れ、本校の取り組みを報告するとともに、教員のブラッシュアップの機会にもなっている。4年制看護師基礎教育の成果を研究的取り組みにより明らかにすることが課題である。

2) 学習教材の整備(p32)

令和5年度は人体模型（人体解剖模型及び神経系・循環系・門脈系模型）を購入し形態機能学の授業で活用した。講義を聞いて模型を触り、自分の体で確かめ講義に戻るといったアクティブラーニング形式で行ったところ、再試験の受験者が例年より減少した。

学内で使用するパソコン6台をリース契約で更新した。講義で使用する動画などスムーズに再生されるようになり、授業中のストレスが改善した。

教材図書の本数は約17,000冊で、令和5年度は555冊購入した。学生が最新の知識を学ぶことができるよう計画的に揃えている。

令和4年度から電子教科書を取り入れているが、施設内のwi-fi設備が整っていないため(限られた場所で講師が使用する程度の機能)、授業中に動画や資料を学生の端末に配信することができない。本課に交渉しながら早期に整備することが課題である。

3)専任教員の確保と働き方について(p18~)

令和5年度の専任教員数は定員31名のところ30名でスタートし、1名の途中退職があった。また、1名が休職に入り、全員でカバーしながら教育活動を行った。県内全体の専任教員が不足しており今後も確保困難は続くと予測される。教員は、臨地実習指導をしながら授業も並行して行うため講義の準備は持ち帰りがほとんどで、その他にも様々な事務作業があり負担が大きい。課題として、①少ない人数で教育の質を落とさずに教育活動を継続するために何ができるのか、②業務改善により教員が本来業務に専念できる体制をつくることの2点がある。

4)施設整備

・新館3階合同教室1・2・3の照明をLEDに改修(p18)

省エネが期待できる。未改修の教室のLED化についても県の担当部署に要望中。

・教室のある新館の空調機の運転を始業時間より前に開始(p22)

夜間に上昇した室温を速やかに下げる目的で実施。一定の効果が得られた。引き続き教室温度の適正管理を行う。

・新館3階廊下部分の窓ガラスに遮熱フィルムを施工(p22)

冷房効率の向上が期待できる。

(1)教育課程

1)カリキュラム運営(p2)

本年度は、1年次・2年次が第5次改正カリキュラム（以下、新カリキュラム）、3年次・4年次は旧カリキュラムと、カリキュラムが混在する学校運営となっている。新カリキュラムは、4年制カリキュラムの評価から「科目の順序性」「横断科目のすみ分けと教授内容の重複」「生活者としてより深く理解するための教授内容と時期」等を見直し運用を開始した。特に「横断科目のすみ分けと教授内容の重複」については、発達看護論と健康段階別看護論の教授内容を精選し実施した。しかしながら今年度運用するなかで発達看護論における高齢者の加齢変化を教授する時間数が減少することでの臨地実習に向けた学習内容の不足が明確になり、令和6年度に向けてその時間数・内容を調整した。

2)学生の看護実践体験の保証(p4)

新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、感染対策・行動制限等は徐々に緩和されてきた。また実習施設の協力により、臨地での実習を行うことを大切に各施設と連携ができ、臨地実習がほぼ計画通りに実施でき目標達成ができた。次年度に向けては、更に感染対策をコロナ禍前の状況に戻しながら学習できるように調整を行い、専門職業人を目指す看護学生として感染予防や自己の健康管理の必要性を理解し行動できるよう、入学時から意識づけを行い実施されるように継続的に指導していく。

3)学生の看護実践体験の保証—実習施設の確保—(p4)

産科病棟、小児病棟での実習施設の確保は継続して困難な状況にあり、医療機関での実習にこだわらず地域包括ケアシステムの中で様々な施設での実習を検討し、施設確保に努めていくことに方針を変更した。具体的には次年度の発達看護論実習について、母性病棟、助産所ではなく子育て支援センターで実施できるよう調整中である。今後も、早めに臨地実習の受入れ状況等の情報収集を行い、適宜速やかに調整を行い新規開拓等、実習施設と連携を図りより効果的な学生指導につなげられるよう調整していく。

(2)教授・学習・評価

1)形態機能学、生化学の工夫(p10)

令和4年度の1年次生の疲弊感を改善すべく、令和5年度は、学生の自律した学びを支えるためには学生が学習にチャレンジするための“ゆとり”も必要と考え、学びやすい教科書選定ならびに各課題提出時期の調整や授業日程の工夫を意図的に実施した。特に形態機能学では、非常

勤講師と調整を繰り返し、座って聞くだけの講義スタイルではなく、「講義⇒模型を触って自分の身体で確認⇒再度視聴覚教材で知識を確認する」といった能動的な教授方略に変更し、成績の向上が図れた。さらに生化学についても非常勤講師と看護基礎教育での生化学における学習事項を確認しあい教科書の変更、教授内容の工夫を行い、再試対象者の減少につながった。

2) 臨地実習におけるつなぎ発展する時間(p10)

臨地実習での学びを豊かにしていくためには、実習前・実習中・実習後の学習準備・振り返りが大切である。新カリキュラムより、実習時間以外に自分自身で学習準備・振り返りができるよう実習前・実習中・実習後に授業日程を入れず自己学習できる自由な時間が取れるように工夫をした。この時間を「つなぎ発展する時間」と位置づけ、学生個々が主体的かつ計画的に実習に向けた学習、技術練習、振り返り等に活用することを目指している。授業評価からは「臨地実習が大変だが楽しい」という学生の声があり、「つなぎ発展する時間」が、学生が学習にチャレンジするための“ゆとり”を生み、結果につながっているのではないかと考える。

(3) 入学・卒業・就職・進学

1) 学生支援(p23)

学生生活で生じる悩みの相談に応じるためにカウンセラーによるスクールカウンセリングを実施している。利用者の延べ人数は、令和4年度が48件、令和5年度は33件と減少している。これは、新型コロナウイルス感染症5類移行により、学校生活だけでなく日常生活においても制限されていた社会的不安から解放されたことが影響していると考えられる。学生の抱える悩みは多様であり、教員と連携しながら支援を継続していく。

2) 入学試験状況(p25)

入学試験については表16～18の通り。18歳人口の減少と看護系大学の増加により応募者は年々減少している。今年度から一般試験科目の英語を廃止し国語、数学のみに変更した。また、県の便りにも試験日を掲載した。応募者数は昨年度から4名の減少にとどまり、定員を満たす入学生を確保できる見込みである。本校を知るきっかけに高校教員の勧めの割合も多く、次年度は高校訪問に力をいれていく。

3) 在学生の状況(p26)

令和6年2月13日現在、休学者は5名で、理由は学業不振や進路への迷い、精神面での不調である。教員が一人ひとり丁寧にサポートしながら、最善の選択ができるようかかわっており、令和5年度途中の退学者は0名であった。

4) 卒業生の進路(p28)

82名が卒業し80名が県内の医療機関に就職が内定している。2名は助産師学科に進学予定。

(4) 地域社会・国際交流

1) 地域交流、社会貢献(p29)

新型コロナウイルス感染症の5類移行により地域でも様々なイベントが開催された。

本校への依頼は積極的に受け入れ、表21～22のとおり学生ボランティアに延べ62名が自主的に協力し、地域住民との交流を通して様々なことを体験し成長する機会になっている。また、地域の方々にも大変喜ばれている。今後も地域交流を積極的に行い社会に貢献していきたい。

(5) その他

1) 専任教員の教育力向上(P28～31)

学内研修の実施や学会・研修等に計画的に派遣し、学会には研究成果を3題発表した。また、外部からの講師依頼も積極的に受け入れ、本校の取り組みを報告するとともに、教員のブラッシュアップの機会にもなっている。4年制看護師基礎教育の成果を研究的取り組みにより明らかにすることが課題である。

2) 学習教材の整備(p32)

令和5年度は人体模型（人体解剖模型及び神経系・循環系・門脈系模型）を購入し形態機能学の授業で活用した。講義を聞いて模型を触り、自分の体で確かめ講義に戻るといったアクティブラーニング形式で行ったところ、再試験の受験者が例年より減少した。

学内で使用するパソコン6台をリース契約で更新した。講義で使用する動画などスムーズに再生されるようになり、授業中のストレスが改善した。

教材図書の本数は約17,000冊で、令和5年度は555冊購入した。学生が最新の知識を学ぶことができるよう計画的に揃えている。

令和4年度から電子教科書を取り入れているが、施設内のwi-fi設備が整っていないため(限られた場所で講師が使用する程度の機能)、授業中に動画や資料を学生の端末に配信することができない。本課に交渉しながら早期に整備することが課題である。

3)専任教員の確保と働き方について(p18~)

令和5年度の専任教員数は定員31名のところ30名でスタートし、1名の途中退職があった。また、1名が休職に入り、全員でカバーしながら教育活動を行った。県内全体の専任教員が不足しており今後も確保困難は続くと予測される。教員は、臨地実習指導をしながら授業も並行して行うため講義の準備は持ち帰りがほとんどで、その他にも様々な事務作業があり負担が大きい。課題として、①少ない人数で教育の質を落とさずに教育活動を継続するために何ができるのか、②業務改善により教員が本来業務に専念できる体制をつくることの2点がある。

4)施設整備

・新館3階合同教室1・2・3の照明をLEDに改修(p18)

省エネが期待できる。未改修の教室のLED化についても県の担当部署に要望中。

・教室のある新館の空調機の運転を始業時間より前に開始(p22)

夜間に上昇した室温を速やかに下げる目的で実施。一定の効果が得られた。引き続き教室温度の適正管理を行う。

・新館3階廊下部分の窓ガラスに遮熱フィルムを施工(p22)

冷房効率の向上が期待できる。

(1)教育課程

1)カリキュラム運営(p2)

本年度は、1年次・2年次が第5次改正カリキュラム（以下、新カリキュラム）、3年次・4年次は旧カリキュラムと、カリキュラムが混在する学校運営となっている。新カリキュラムは、4年制カリキュラムの評価から「科目の順序性」「横断科目のすみ分けと教授内容の重複」「生活者としてより深く理解するための教授内容と時期」等を見直し運用を開始した。特に「横断科目のすみ分けと教授内容の重複」については、発達看護論と健康段階別看護論の教授内容を精選し実施した。しかしながら今年度運用するなかで発達看護論における高齢者の加齢変化を教授する時間数が減少することでの臨地実習に向けた学習内容の不足が明確になり、令和6年度に向けてその時間数・内容を調整した。

2)学生の看護実践体験の保証(p4)

新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、感染対策・行動制限等は徐々に緩和されてきた。また実習施設の協力により、臨地での実習を行うことを大切に各施設と連携ができ、臨地実習がほぼ計画通りに実施でき目標達成ができた。次年度に向けては、更に感染対策をコロナ禍前の状況に戻しながら学習できるように調整を行い、専門職業人を目指す看護学生として感染予防や自己の健康管理の必要性を理解し行動できるよう、入学時から意識づけを行い実施されるように継続的に指導していく。

3)学生の看護実践体験の保証—実習施設の確保—(p4)

産科病棟、小児病棟での実習施設の確保は継続して困難な状況にあり、医療機関での実習にこだわらず地域包括ケアシステムの中で様々な施設での実習を検討し、施設確保に努めていくことに方針を変更した。具体的には次年度の発達看護論実習について、母性病棟、助産所ではなく子育て支援センターで実施できるよう調整中である。今後も、早めに臨地実習の受入れ状況等の情報収集を行い、適宜速やかに調整を行い新規開拓等、実習施設と連携を図りより効果的な学生指導につなげられるよう調整していく。

(2)教授・学習・評価

1)形態機能学、生化学の工夫(p10)

令和4年度の1年次生の疲弊感を改善すべく、令和5年度は、学生の自律した学びを支えるためには学生が学習にチャレンジするための“ゆとり”も必要と考え、学びやすい教科書選定ならびに各課題提出時期の調整や授業日程の工夫を意図的に実施した。特に形態機能学では、非常

勤講師と調整を繰り返し、座って聞くだけの講義スタイルではなく、「講義⇒模型を触って自分の身体で確認⇒再度視聴覚教材で知識を確認する」といった能動的な教授方略に変更し、成績の向上が図れた。さらに生化学についても非常勤講師と看護基礎教育での生化学における学習事項を確認しあい教科書の変更、教授内容の工夫を行い、再試対象者の減少につながった。

2)臨地実習におけるつなぎ発展する時間(p10)

臨地実習での学びを豊かにしていくためには、実習前・実習中・実習後の学習準備・振り返りが大切である。新カリキュラムより、実習時間以外に自分自身で学習準備・振り返りができるよう実習前・実習中・実習後に授業日程を入れず自己学習できる自由な時間が取れるように工夫をした。この時間を「つなぎ発展する時間」と位置づけ、学生個々が主体的かつ計画的に実習に向けた学習、技術練習、振り返り等に活用することを目指している。授業評価からは「臨地実習が大変だが楽しい」という学生の声があり、「つなぎ発展する時間」が、学生が学習にチャレンジするための“ゆとり”を生み、結果につながっているのではないかと考える。

(3)入学・卒業・就職・進学

1)学生支援(p23)

学生生活で生じる悩みの相談に応じるためにカウンセラーによるスクールカウンセリングを実施している。利用者の延べ人数は、令和4年度が48件、令和5年度は33件と減少している。これは、新型コロナウイルス感染症5類移行により、学校生活だけでなく日常生活においても制限されていた社会的不安から解放されたことが影響していると考えられる。学生の抱える悩みは多様であり、教員と連携しながら支援を継続していく。

2)入学試験状況(p25)

入学試験については表16～18の通り。18歳人口の減少と看護系大学の増加により応募者は年々減少している。今年度から一般試験科目の英語を廃止し国語、数学のみに変更した。また、県の便りにも試験日を掲載した。応募者数は昨年度から4名の減少にとどまり、定員を満たす入学生を確保できる見込みである。本校を知るきっかけに高校教員の勧めの割合も多く、次年度は高校訪問に力をいれていく。

3) 在学生の状況(p26)

令和6年2月13日現在、休学者は5名で、理由は学業不振や進路への迷い、精神面での不調である。教員が一人ひとり丁寧にサポートしながら、最善の選択ができるようかかわっており、令和5年度途中の退学者は0名であった。

4) 卒業生の進路(p28)

82名が卒業し80名が県内の医療機関に就職が内定している。2名は助産師学科に進学予定。

(4) 地域社会・国際交流

1) 地域交流、社会貢献(p29)

新型コロナウイルス感染症の5類移行により地域でも様々なイベントが開催された。

本校への依頼は積極的に受け入れ、表21~22のとおり学生ボランティアに延べ62名が自主的に協力し、地域住民との交流を通して様々なことを体験し成長する機会になっている。また、地域の方々にも大変喜ばれている。今後も地域交流を積極的に行い社会に貢献していきたい。

(5) その他

1) 専任教員の教育力向上(P28~31)

学内研修の実施や学会・研修等に計画的に派遣し、学会には研究成果を3題発表した。また、外部からの講師依頼も積極的に受け入れ、本校の取り組みを報告するとともに、教員のブラッシュアップの機会にもなっている。4年制看護師基礎教育の成果を研究的取り組みにより明らかにすることが課題である。

2) 学習教材の整備(p32)

令和5年度は人体模型（人体解剖模型及び神経系・循環系・門脈系模型）を購入し形態機能学の授業で活用した。講義を聞いて模型を触り、自分の体で確かめ講義に戻るといったアクティブラーニング形式で行ったところ、再試験の受験者が例年より減少した。

学内で使用するパソコン6台をリース契約で更新した。講義で使用する動画などスムーズに再生されるようになり、授業中のストレスが改善した。

教材図書の本数は約17,000冊で、令和5年度は555冊購入した。学生が最新の知識を学ぶことができるよう計画的に揃えている。

令和4年度から電子教科書を取り入れているが、施設内のwi-fi設備が整っていないため(限られた場所で講師が使用する程度の機能)、授業中に動画や資料を学生の端末に配信することができない。本課に交渉しながら早期に整備することが課題である。

3)専任教員の確保と働き方について(p18~)

令和5年度の専任教員数は定員31名のところ30名でスタートし、1名の途中退職があった。また、1名が休職に入り、全員でカバーしながら教育活動を行った。県内全体の専任教員が不足しており今後も確保困難は続くと予測される。教員は、臨地実習指導をしながら授業も並行して行うため講義の準備は持ち帰りがほとんどで、その他にも様々な事務作業があり負担が大きい。課題として、①少ない人数で教育の質を落とさずに教育活動を継続するために何ができるのか、②業務改善により教員が本来業務に専念できる体制をつくることの2点がある。

4)施設整備

・新館3階合同教室1・2・3の照明をLEDに改修(p18)

省エネが期待できる。未改修の教室のLED化についても県の担当部署に要望中。

・教室のある新館の空調機の運転を始業時間より前に開始(p22)

夜間に上昇した室温を速やかに下げる目的で実施。一定の効果が得られた。引き続き教室温度の適正管理を行う。

・新館3階廊下部分の窓ガラスに遮熱フィルムを施工(p22)

冷房効率の向上が期待できる。